

被災の記憶 人つなぐ

阪神大震災や東日本大震災の記憶を風化させず、どう語り継ぐのか。26日、淡路市の淡路夢舞台国際会議場で開催された「第2回全国被災地語り部シンポジウム」(実行委員会主催、読売新聞本誌も協賛)で。地元淡路市と東北、九州の被災地で活動を続ける語り部らがパネル討論などで意見を交わし、連携しながら伝え続けていくことを確認した。

淡路・語り部シンボ 伝える大切さ確認

語り部の経緯

淡路市からは、旧北淡町(現淡路市)の災害対策本部で避難所運営に当たった当時の経緯を語っている宮本登志出・同市企画政策課長が登壇。「避難所におこるような配膳は、「取りかえる」よう求めた方がいい」と忠告された。高齢者が少しでも歩けるようにという配慮だった。被災者も冷静になると、自分を中心に考えがちになるとも学んだ」と振り返った。

東日本大震災と大津波に見舞われた宮城県南三陸町からは、朝日部の伊藤優さんが参加。バスで津波の爪痕をめぐる試みを昨年だけで1・80回行ったという「津波で灰色」色になった町を巡って「すい」で暮らしてしまえば、私たちがすべてを失ったことが忘れられていくように思う。現地では被災者が語るのを聞き、そこから起きたアートの興味を持ちたい」と話した。

行政が意見聞く体制 遺構残す意義説明 役立つ防災資料

全国からの応援職員に助けられ、一部の避難所で住民組織が運営を進めたことを伝えた。「住民(見守)の信」を頼りながら、避難者の意見や行政が吸い上げる仕組みを作っておけば、住民個々の保存には関心のある人が対して、今は90%以上が「残して」くれて良かった」と語った。

パネル討論

阪神大震災の語り部として活動を続ける北淡震災記念公園(淡路市)副支配人 見守り隊の宮本登志出は「野島勲の米山正幸さんは、震災の歴史を学ぶ大切さを語っていたが、今では90%以上が「残して」くれて良かった」と語った。



東日本大震災の語り部の宮本に、400人余りが耳を傾けた。(淡路市の読売新聞国際会議場)

つた」と語り、遺構を残し語り合う場も設けられず意義を強調。震災に「た。地元のホテルで修学旅行す」とは紙を渡して、生つに体験を語つて、取り入れたらストリートに、宮城県仙台市若林区の佐藤さんには「震災当時、小車日本大震災後、南三陸町で被災者を受け入れた南三陸ホテル海洋の女将、阿」と話した。県内から参加した部会さんには、海から離れた淡路、舞子、津名を高い土地で津波の犠牲者が多かたとして「海に近い人は、1700年の子り地獄の津波で、それを繰り返して、それが命を守ることになった」と明かした。こうして告白し、すでに被災者の歴史を学ぶ大切さを説明。風化を防ぐには「被災地を訪ねた人が地元で語り、周りの関心がない人に「伝えたい」と、第2の語り部」としての広がりを開いた。

91年の長崎県雲仙霧島岳噴火を伝える島根県松江市の会館(長崎県島根県松江市)学芸員の長井大輔さんは「25年が過ぎて知らない世代が増えている、しっかりと伝えていきたい」。熊本市の植松浩二両市長は昨年4月の熊本の大地震をより語り、「行政ができることには限界がある」と求めた。卒業して地元を離れる高生は「今後は身近な人となつた」といい、震災関連の防災について話し合い、周りを防ぐために「地震で助かった人たちの感謝を込めて、ぜひかま伝えてほしい」と訴えた。

高校生たち

被災地で生まれ、次世代を担う高校生たちが、思い

2017/2/27 【読売新聞】
被災の記憶 人つなぐ